
ススイラッド・ヨネ・アブガリオン・四世ハナの心臓にまつわる話

ブルゴーニュ公・山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

1 揉め事、おれの心の猿、剣、拉致（前書き）

[illegible]

1 揉め事、おれの心の猿、剣、拉致

1

本来ならば主人公は樋口洋介だろう。ヒロインは野々村加奈で決まりだ。このふたりの物語は謂わば、冒険や魔法や恋やその他諸々のドラマがてんこ盛りのメインストリーム。“手垢が付きまくって茶色く変色した王道”ってところか。

だがこれはおれの物語だ。これから話すのはいかにしておれが今回のごたごたに巻き込まれ、物語の本筋の周辺をうるちよろしてたかに終始する。だから、全てはこの田中智弘の視点から語られ、現場に居合わせなかった事件に関しては、それがどれだけ重要なエピソードであつてもほとんど言及されない。よろしいか？

さて、樋口洋介とは何者か？ 県立桜森高等学校二年五組に在籍身長百七十二、三センチ程度の痩せ型——小柄な部類だが、童顔でそこそこ整った顔をしてる。合同体育の授業で見た感じだと、運動神経は可もなく不可もなくだ。

ぱつとせんやつで、決して記憶に残るタイプじゃない。

そんなやつがふとおれの目を惹いたのは、トイレや廊下ですれ違った際に、度々、深刻そうな顔をしてることがあったから。世界の終わりみたいな、悩みの種に始終こつき回されてるような、そんな顔。便秘に悩まされてるんでなければ、イジメにでも遭ってるんだろうと思つてた。

せいぜいその程度の印象で、おれにとっては集団に埋没した一生徒にすぎんかった。

続いて野々村加奈。こいつは今年の春、おれと同様に新学年に合わせて転校してきた。クラスは二年一組。外見は——そう、所謂クール・ビューティーってやつで、小柄ですらったとした体型にどこか超然とした雰囲気纏ってる。海外の血でも混じってるのか、容貌はクォーターっぽい。腰まで届く栗色の髪、茶色の瞳、白い肌、くつきりとした目鼻立ち。おれの好みからすると幼児体型にすぎるが、一時期ほかのクラスのアホどもがのぼせ上がって、噂の転校生のご尊顔を眼に収めるべく野次馬根性をむき出しにしてたほどの類稀な美少女。

樋口とは違い目立つタイプだ。とはいえ、十代の速度じゃ物珍しさが見慣れた日常へと風化するのにたいして時間はakaran。やがて周囲の浮かれ騒ぎは沈静化し、次第に野々村は新しい環境に溶け込んでった。

かく言うおれもすごい美人だと思ったクチ。でも、特にそれ以上の興味を覚えなかったんで、時おり見かける容姿端麗な女子生徒のことは背景の一部くらいにしか認識してなかった。

少しだけ触れたが、おれも今年の春に桜森高校に転校してきた。この“転校生”ってポジションが後にちよつとした意味を持つてくるんだが、まずは話を先に進めよう。転校の理由はありきたりだ——父親の仕事の都合ってやつ。親父は外資系の保険会社に勤めてて、支店の開設に伴い副支店長として転勤が決まった。単身赴任とならなかったのは、？・数年単位の長期化が見込まれ、おしどり夫婦として鳴らすお袋が親父と離れることを嫌がった。？・お袋は都内の生活に嫌気が差してた。？・地方ならば、首都圏じゃ諸々の事情から諦めていたマイホームが購入できる。

かくして世田谷区のマンションを引き払い、生まれ育った土地から遠く離れた新築の広い一軒家に引っ越すことと相成った。刺激的なもんで溢れ返ってる首都からやや退屈な地方都市へ。十代の少年にとっては悲劇と受け取られるかもしれんが、特に不満はなかった。

むしろ、おれの感性からすれば変化は大歓迎。お袋と同じく都内の生活は食傷気味だったし、高校生活に何ら思い入れはなかったし、付き合ってた彼女とはかなり険悪なムードが漂い始めてたし、地方都市とはいえここ数年でかなり開発が進んだおかげで近隣には美術館が多いし、何より重要なことに、これまでよりも広い自室兼アトリ工が確保できる。

新しい高校生活はというと、同じ転校生でも上手いことやってた野々村とは違い、おれは一学期が始まって二週間もせんうちに“変わり者”とレッテルを貼られ、スクール・カーストで言うところの最下層——変人／オタク／はぐれ者階級に組み込まれた。前の学校でも似たような扱いだったんで気にしちやいなかった。

こっちの言い分は、“ロバが吠えたからといって、なぜ怒る必要がある？”。

おれの日常を逐一語っても退屈なだけだろうから、ここいらで、先のおふた方のやんごとなき事情に巻き込まれて生活がとち狂った日の二日前まで早送りしよう。

そもそのきっかけは、五月末の中間テスト明けの放課後に、校門を出たところで内山と小柄な男子生徒が対峙してる現場に行き会ったこと。

内山一輝については、こいつが一年生で、ちょっとしたきっかけで顔見知りになったってことを知っておいてもらえれば充分。どうせすぐ後であれこれ説明することになるし、今のところ、こいつとの出会いや関係性なんてすっ飛ばしても特に問題はない。

その内山のお相手こそが樋口洋介だったんだが、この時はまだ名前を知らなかった。だもんで、おれの目に映ったのは五組の何某こと おれの心の猿。—— おれの心の猿 ってのはこいつの深刻そうな顔を初めて見た時にふと思いついた渾名で、好きな作家の小説に出てくる“マイ・ハート・エイク”を“マイ・ハート・エイク”と言い換えた辛辣な科白が元ネタ。

内山と 心の猿 氏。ふと足を止めたのはちよいとふたりの様子がヘンだったからだ。遠目には立ち話してるように見えても、近くからだ、そういう穏やかな空気じゃない。心の猿 氏は目が据わり、今にも内山に掴みかかりそうで、対する内山はといえば、相手を小馬鹿にしたような涼しげな顔。こいつらにどんな経緯があるにせよ、取っ組み合いの喧嘩をおっ始めるのも時間の問題だ。場の雰囲気には陰悪さをあと一ミリグラム投じれば事足りる。

校門から出てきた連中は不穏な空気を感じ取り、好奇の視線をふたりに注いでた。みんな塾やらヴィデオ・ゲームやらに忙しいんで立ち止まって見物してるような暇人はほとんどいなかったが、中にはそんなやつもいて、女子生徒のひとりが「先生呼んでくる」と言ったのが耳に入った。

揉めてるのが他人なら放っておくところ。だが、顔見知り程度の関係にすぎなくとも、内山は一応知り合いだ。自分で自分を親善大使に任命し、身体ごとふたりの間にひょいと割って入った。「ほらほらキミたち、笑って笑って」

心の猿 氏はおれをちらつと見て、無視した。

内山は微笑んだ。「こんにちは、田中先輩」

「うん、キミはいい笑顔だ。でも、もうひとりの子は笑顔が足りないよ？」 心の猿 氏は一ミリも笑おうとしなかった。内山に訊く。「何があつたんだ？」

「まあいろいろと。先輩が気にするほどのことじゃないですよ」

「おれは気にしてないけど、ほかの連中は気にしてる。どっちが悪いのか知らんが、もつと場所を選べよ。悪目立ちしてるぜ、キミたち。で、おまえ、何かこいつを怒らせるようなことしたのか？ ラブレターを送りつけたとか、狂犬病のワン公をけしかけたとか、くそナチ呼ばわりしたとか」

微笑みが大きくなる。「先輩は楽しい人ですね。人のことをからかってないと死ぬ病気にでも罹ってるんですか？」

「精神衛生上のエゴの心理療法的ガス抜きというやつだよ、ワトソ

ン君」

心の猿氏が訝しそうに訊いてきた。「君は？」

「ボク、田中」と指をぴらぴら振ってやる。「ぴちぴちの十七歳。よろしくね」

「……確か、同じ学年だよな？ 転校生だっけ」

「そうだよ。ボク、転校生。よろしくね。ほら、笑って笑って」

心の猿氏は内山に目を戻した。「どという関係だ？」

「ちよつとした知り合いです。でも、誤解しないでください。田中先輩は無関係です」

せわしなくおれと内山を交互に見る。「おまえが待ってた相手って、そのタナカってやつか？」

「ええ。ちよつと個人的な用があつたので。……どうも勘違いされてるようです。くどいようですけど、田中先輩は無関係です」

猜疑心に凝り固まった様子でおれを値踏みしてる心の猿氏は放っておいて、内山を肘で突ついた。「おれを待ってたって？」

「ええ。お願いしたいことがあつたんです」

「何を？」

「この学校にはもう長くいられないから、先輩の絵を見せていただけないかなって」

「おまえ、転校でもするのか？」

微笑が寂しげなものに変わる。「転校じゃなくて、辞めるんです。辞めたくはないんですけど、まあ、いろいろと事情が」

こいつにしては歯切れが悪かったが、誰しも、言いたくないことのひとつやふたつはあるもの。立ち入ったことを訊くのはやめておいた。「だから絵を見せると」

「そうです。記念についてことで。僕は先輩の作品の大ファンですからね」

「作品なんて大げさだ。デッサンしか見てないだろ？」

「デッサンとは、その芸術家の潜在能力を映す鏡です」

内山はこの手の物言いが大好きだ。

「僕はこれでも目が肥えてる。個人的にはあなたを天才だと思つてます」

「芸術家ときてそのうえ天才とはね。何者でもないガキをつかまえてよく言つぜ。なんだか馬鹿にされてる気分だ」

「まさか。それどころか心の底から尊敬してますよ。この話はいずれまた。さて――」おれたちのやりとりを妙な目つきで伺つてる

心の猿 氏に顔を向けた。「場所を変えましょうか。確かに僕たちは目立つてる」

「……わかった。いいだろう」心の猿 氏はおれに一瞥をくれた。

「君が本当に部外者なら、ついて来ないでくれ」

「仲間はずれはいけないうって先生が言つてたよ」

「ついて来ないでくれ」

「先輩、大丈夫です」と内山。「僕のことならご心配なく。自分ではなんとかしますから」

そこまで言うのならこれ以上付き合う義理はない。顔見知りとしての役目は充分果たした。肩をすくめて「好きにしろよ」と言つてやる。「ほどほどにしとけ」

「ほどほどになるように善処します」

言つちやなんだが、世の中には人間関係の軋轢なんぞよりももっとほかに見るべきもの、気にかけるべきもの、面白いもので溢れ返つてゐる。たとえば創作活動。これに比べればオーガズムなんてケチくさい快樂にすぎん。あの電柱を見る、あのデカイ橋を見る、頭上の夜空を見上げる。あの家は？ あの道は？ あの光と影の戯れは？ どれひとつ取つても見慣れたものばかりだが、少しばかりの感受性の持ち合わせさえあれば、うつとりすること請け合い。そこに腕が加わるとなんだって絵になり、いざ筆を手を取れば、研ぎ澄まされた意識と実験精神がせめぎ合う甘美な時間が幕を開ける。そういう次第で、風景画のネタを収集すべくデジカメ持つて夜の散歩としゃれ込んだ時には内山の一件なんぞすっぱりと忘れてた。

問題は、おれは忘れててもほかの連中は忘れてなかったってこと。本格的なボタンの掛け違いが起こったのは二日後のことで、余興としてまず、昼休みも終わろうかという頃に校内放送で職員室に呼び出された。おれの名前といっしょに連呼されてるのは、二年五組の“ヒグチ ヨウスケ”。こっちは『シラノ・ド・ベルジュラック』の世界に没入してたんで何のことやらさっぱりだったが、職員室に入室し、教師連に取り囲まれてる 心の猿 氏を目にしてやっと呼び出された理由に思い当たった。こいつ、ヒグチ ヨウスケっていうのか。

おれのクラス、二年七組担任の谷戸が呼びかけてきた。「田中、こっちだ」

包囲網がモーセの紅海よろしく割れて、その内側へ入るように促す。教師の面子は全部で六人。谷戸に、数学の園田に、学年主任の早瀬に、名前を知らんのがほか三名。全員表情が暗い。なんだか大事だ。促されるままヒグチの隣に並ぶと、包囲網が閉じた。「やあ先生。いったいなんでしよう？」

「おまえらふたり、一昨日の放課後に揉めてたんだって？」

「誤解があるようですね。揉めてたのはこのヒグチくんと一年の内山です。ボクは止めに入っただけですよ。もう帰っていいですか？」

「まだだ」

若い女教師が横から言った。「何があったのか話して」

ヒグチが口を開く。「すみません。ちょっと口論になっただけです」

「何があったの？」

ヒグチが言うには、内山と肩がぶつかってつい感情的になった、お互い頭に血が上って収拾がつかなくなった、云々。作り話の臭いがぷんぷんしたが、おれは黙っておいた。

「そのあと僕たちは場所を変えて、それで、ちょっと冷静になったんです。仲直りってほどじゃないですけど、お互いに謝って別れました」

実際、ヒグチの顔に傷や痣はなく、一昨日と全く変化してなかった。どうやら、内山と路上ボクシングに興じたわけじゃないようだ。あるいは、ソフトな外見に似合わず試合を一方的に運んだのかもしれない。

「あの、お騒がせしてすみませんでした。彼にはもう一度謝っておきます。僕にも非がありますから」

女教師は下唇を噛んだ。「それだけ？」

「はい」

「内山君から何か聞いてない？」

「何をですか？」

「何でもいいから、聞いてない？」

「いえ、何も」

「田中君は何か聞いてない？」と質問の矛先がこっちに向いた。「何でもいいの」

「ボクが聞いたのは、彼らがお互いを近親相姦呼ばわりしてたことと、決闘をするに際してサーベルとマスケツト銃のどっちを使うか取り決めてたことくらいです。あとは時間と場所ですね。朝の五時に墓場とかナントカ」

途中で遮られるかと思ったが、ヒグチが抗議の声を上げたのはこっちが喋り終えてからだった。「そんなこと言っていないだろ！」

「冗談だよ」

学年主任の早瀬が吠える。「田中、ふざけるな！」

「だから軽い冗談ですつてば。場を和ませようっていう気遣いですよ」

「冗談じゃ済まないの」と女教師。「田中君、だよな？ 田中君から見たふたりはどうだったの？」

最初の話を少し長くして繰り返してやった。内山とは顔見知りなんで見るに見かねて止めに入っただけのもの、揉め事の原因は聞いてないし、ヒグチと内山が場所を変えてから後のことは知らん、と。

「じゃあ田中君は前から内山君のことを知ってたってこと？」

「そう言いましたか？」

「仲は良かったの？」

「どうでしょう、挨拶したり少し立ち話したりするくらいならありますけど、お互いの好きな人を打ち明け合うつて間柄じゃありませんね」

「冗談はやめろ」と谷戸。「聞かれたことだけ答えろ」

「過不足なく聞かれたことにちゃんと答えてるじゃないですか」

「ねえ田中君」と女教師。「本当に何か聞いてない？」

「だから何も聞いてませんってば。訊きたいことがあるなら本人に訊けば……そっぴゃ、内山はどこです？　こういう場合、あいつも呼ばれるんじゃない？」

教師連が口を閉ざして妙な沈黙が漂い——ここでピンときた。この女のさっきの問いかけ。——“仲は良かったの？”——。過去形だ。ああ、なるほど。

「内山、あいつ学校辞めたんですね？」

女教師がはつとした。「知ってたの？」

「いいえ、今知りました。一昨日、あいつが言ってたんですよ、学校辞めるって」先回りして言葉を足しておく。「なぜかとか何時にとか、そのへんの詳細は聞いてませんけど」

「本当に？」

「本当に」

「そっか。うん、そうかもね」

「それにしても、これって騒ぎすぎじゃないですか？　内山のやつ、普通に学校辞めたわけじゃなさそうですね」

早瀬が忌々しそうにおれを見た。「詮索するな。おまえには関係ない」

「いえ、話しておきましょう、早瀬先生」と女教師。「この子は頭が回りますし、中途半端に知ってるほうが騒ぎになるかもしれない」
「おれとヒグチを等分に見る。」「これから話すことは誰にも喋らないで」

女教師の話が簡単にまとめると、内山一輝が最後に学校に来たのは校門前の一件があった日で、翌日は無断欠席した。一日中電話を架けても誰も出ない。そのまた翌日、つまり今日も無断欠席し、家族の誰とも連絡が取れないまま自宅まで押しかけてみると――もぬけの空。近所の連中に訊いても返ってくるのは何も知らんって返事ばかり。女教師は言葉を濁しちやいたが、夜逃げを連想するのに充分な状況だ。

「みんなに呼び出しの理由を訊かれたら、一昨日の喧嘩のことで怒られたとだけ説明して。いい？ 内山君のことは話さないでね」

この手の話はどこからともなく広まるもの。そのへんをわかってるうえで空手形を要求してるようだった。おれとヒグチは一切漏らさんと約束し、放免された。

とつくに五時限目は始まって、このままサボってもよかったんだが、今のペースでサボり続けると単位不足になりかねるので教室まで戻ることにした。内山がもういないってことを考えてみたが特に何の感慨も覚えん。階段にさしかかったところでヒグチに話しかける。「おかげでとっても楽しかった。だからってわけじゃないけど、教えるよ。おまえと内山は何を揉めてたんだ？」

一拍間があった。「さっき俺が先生に説明したとおりだよ」

「ああ、あのデタラメならもちろん聞いてた。本当の原因は？」

また一拍置き、硬い声で言う。「だから、さっき説明したとおりだつて言ってるだろ」

これじゃ、“隠し事をしてます”ってメッセージを書いた板切れを首から下げてるも同然。見てて面白かったんで、いっちょカマをかけてやるかって気になった。「ちよつと訊いてみただけさ。キミらの事情なら知ってる」

ヒグチの足が止まった。おれも踊り場で足を止める。

「……知ってるって？」と警戒心も露に睨みつけてきた。

予想以上の反応。

「そうさ。ボクはなんでも知っている」

「……田中智弘、君は何を知っている？」

「ぜーんぶ。ほら、なんでも訊いてごらん」

一歩下がり、わからんってふうに顔をしかめた。「どういっつもりだ？」

「どうもこうも、あー、今更隠しても無駄ってことさ」

「……そうか」と納得した。続けて妙なことを言い出す。「やはりおまえは内山のバックアップだったんだな。僕たちの動きにも気づいてたってわけか」

内山のバックアップ？　僕たちの動き？　何を言つとるのかね、キミは？　完全に意味不明だったが、話が面白い方向に転がり始めたんで認めてやった。「そうさ。おれはバックアップで、おまえらの動きにも気づいてたよ」

ヒグチは軽く腰を落として身構えた。「内山はあれでも話がわかるやつだった。おまえはどうなんだ？　ここで始める気か？」

「おいおい、ちよつと待て。落ち着けよ。今は二十一世紀だぜ？　石器時代じゃないんだ。もっと文明的且つ紳士的な態度つてもんがあるだろ？」

「つまり、おまえも話がわかるやつだと？」

「うん。話し合いの余地はたっぷりとある」

「……話し合い？」

「そう、話し合い」

眉をひそめた。「おまえは僕たちと交渉するために送られてきた、そういうことか？」

今や話の流れは、すっぱ抜けのカーブよろしくおれの頭上を飛び越えてった。こいつ、本当に何を言ってるんだ？　ここらでやめときゃよかったんだろうが、ついつい悪ノリを続けた。「そのとおり、交渉役を仰せつかったんだ」

「交渉役か」

「そ、交渉役」

「なぜ今更……」と独り言のようにつぶやく。「田中、おまえは何

者だ？ 連中の仲間じゃないのか？」

「あー、連中が誰を指すかにもよるね」

ヒグチはぎよつとしておれを見つめた。「ほかにも介入してる連中がいるのか？」

「おうともよ」と即興で続ける。「世界は広いんだぜ。ま、そのへんの事情はおいおいな」

「……わかった。それで、おまえは何者だ？」

「おれはおまえに取り憑いた悪い幽霊さ」

咄嗟に出てきた科白が「おまえに取り憑いた悪い幽霊」。たぶん、おれは本の読みすぎだ。

ヒグチは話を続けたがってた。が、「おまえら何やってる？」つて声が割って入った。階段を見上げる。見回りの教師がこつちを見下ろしてた。「とつくに授業は始まつてるだろ？ さっさと教室に戻れ」

樋口洋介——どうやら、おれとは異なる次元の正気を生きてるらしい。あの真剣さには笑って済まされんものがあつた。クラスのやつにそれとなく訊いてみたんだが、去年樋口と同じクラスで、出身中学も同じだという早坂さん曰く、とっても普通の人。日常に陰謀説を持ち込みたがる救いようのないパラノイア、とは言わなかった。内山は樋口の妄想に付き合わされてたんだろつか。あるいは、内山も同様の——いや、考えすぎだ。内山は理路整然としたお頭の持ち主。戯言を吐くようなやつでもない。まあ、ちよつとヘンなやつではあつたし、理路整然と狂つてた可能性も捨てきれんが、少なくともおれに対してそんな様子は微塵も見せてなかった。

結論。汝、係わるなかれ。

下手に付き合つてやると本格的に樋口の宇宙で展開する陰謀のメインキャストに祭り上げられかねん。もしこつちの予想の上をいくしつこさ／危険性を発揮したならば、気が進まんとはいえ、力づくで諭す必要がある。幸い、こつちのほうga十センチは背が高く、少

なく見積もっても十キ口は重い。

……あいつ、格闘技とかやってなければいいんだが。

こっちの懸念をよそに、六時限目が終わっても樋口は擦り寄ってこなかった。代わりに現れたのが野々村加奈。野々村の話はしたよな？ おれと同じ転校生で、問答無用で周囲の目を奪うタイプの美少女で、ちんちくりんで——とにかくそんなやつだ。下駄箱を開けて革靴を取り出し、振り向いたら、その野々村が目の前に立ってた。つんと澄ました顔に愛想笑いらしきものを浮かべておれを見上げてる。「田中くん、ちよつといいかな？」

「えーと、キミ、野々村さんだっけ？」

「うん」周囲をちらりと見た。「今、時間ある？ 話があるんだけど」

「なるほど。おれが放射してる魅力に抵抗する氣力を失ったとか、その手の類の話だろうか？」

「違うよ？」

ふむ。確かに勇氣を振り絞って告白しに来たってわけじゃなさそうだ。いやに冷静な目つきをしてる。

「そいつは残念だな。だけどまあいいや。キミのために時間を割こう」

「じゃ、ついてきて」

理由はどうあれ、可愛い女の子に誘われてついていかん理由があるか？

屋上のドアを抜けた途端、風が前髪を撫でてった。ぶらぶらとフエンス際まで進み、金網越しに住宅街を見下ろす。一度、腰を据えてこういう風景を描いてみるのも悪くない。両手でフレームを作り、二、三、構図を試す。そのままくると振り向き、野々村を額縁の中に収めた。絵になる娘だが、愛想のかけらもない無表情が玉に瑕。「もう少し表情を柔らかくしてみようか。ところで、キミ、モデルとか興味ない？ ……ああ、ないって顔だな」両手を下げた。「で、

話って？　ボクは興味深々だ。さあ、楽しませてくれよ」

ここで屋上のドアが開き、樋口が姿を見せた。

野々村がこっちに顔を向けたまま言う。「遅いじゃないか」

「ごめん」と樋口。「でも、日直だって言っただろ。それで、状況は？」

「これから始めるところだ」

野々村と樋口は揃ってこっちを見つめた。わかりきったこととはいえ、念のために確認しておく。「樋口、おまえが野々村に頼んだのか、おれを呼び出させて？」

「そうだ。こういうことは早いほうがいい」

「こういうこと？」

「とぼけるのはやめてもらおう」と野々村が偉そうな口調で言った。一陣の風が吹き、長い髪が扇のように広がる。「交渉に決まってる。貴様のおふざけにはうんざりだ」

眉を吊り上げて野々村を見つめた。真剣な顔だ——非常に。あるいは、メルル・ストリープ並みの演技力で真剣にふざけてるのか。

樋口に目をやると、こっちもやはり真剣な顔で事の成り行きを見守ってた。

「交渉ね」

「そうだ」

樋口の頭がどうかしてるんだとばかり思ってたが、野々村がキヤストに加わったことで、性質の悪い冗談に付き合わされてるんじゃないかって疑念が過ぎった。変わり者の転校生をからかってコケにしようとか、そういうやつ。よくよく考えてみれば辻褄が合っていないし、手口が馬鹿馬鹿しいにもほどがあつたが、この時はそこまで頭が回らなかった。「忘れてくれ。おれは帰る」

「待て。我々が相手では不満だと言っただけ？」

無視してドアを目指す。すると、樋口が立ちはだかった。「どけ」と言っただけだったが、一歩も引く様子がない。張り詰めた雰囲気ですくなく首を振る。

野々村の声が背中にぶつかつた。「最初に、我々の言い分を聞いてもらおう」

肩越しに振り向き、いい加減に片手を振ってみせる。「キミたちと違つておれは忙しいんだ」

「我々の言い分。判断を下すのはそれからでも遅くないはずだ」

「言い分とやらは、来世で心行くまで聞いてあげるとも」

「今だ」

「キミもしつこいな。壊れたレコードかよ？」

野々村は勝手に話し始めた。「いいか？ 貴様のことを信用したわけじゃない。だから、まず我々が話を聞き、いくつか質問をする。貴様が不満に思おうとも、それだけの権限は与えられている。大物が交渉のテーブルに上がるのはそれからの話だ」

もうホント、こいつらおかしいんじゃないか？ “権限”とか、

“交渉のテーブル”とか、言うことがいちいち大げさだ。このふたりの振る舞いにはうんざりしてたにもかかわらず、思いがけない笑いの発作に襲われた。口をきける程度に咽喉の震えが静まつてから、提案する。「じゃ、五分だ」

「五分？」

「そ。交換条件といこうじゃないか、キミたち」

野々村は好戦的に目を細めた。「条件？」

「簡単さ」と説明してやりながらフェンス際に戻り、鞆を投げ出した。「おれの貴重な五分をキミらにくれてやる。その間だけしつこいのは我慢してやるよ。代わりに、五分経った時点でおれはキミらにとって透明人間になる。今後一切、おれを呼び出すな、話しかけるな、近づくな、以上」

野々村と樋口は互いの顔を見て、アイコンタクトだかテレパシーだかを交わした。野々村がうなずく。「わかった。条件を呑む」

「じゃ、さつさと始めてくれ」

「最初に幾つか質問がある」野々村は狂つたように暴れる髪を耳に引っ掛けた。「田中智弘、貴様は何者だ？」

……オーケー。条件を出したのはこっちだ。どれだけアホな質問であろうと付き合ってやろうじゃないか。「うむ。いきなりで申し訳ないんだが、その哲学的な問いかけにはまだ答えを出せてないんだ。好きな色とか好きな食べ物とかなら答えてやれるんだが。さ、これを踏まえて次の質問頼む」

「ふざけるな。貴様は洋介に言ったそうじゃないか、“おまえに取り憑いた悪い幽霊だ”と。もう一度訊く。何者だ？」

「悪い幽霊ってことで納得しといてくれ」

「……それ以上答える気はないと？」

「ないね。次の質問どーぞ」

野々村はちらりと樋口と視線を絡ませた。「いいだろう。だが、これには答えてもらう。貴様はどこに属している？」

「そうさな、不干涉共存主義ってカテゴリーはある？」

「不干涉？」戸惑った顔になった。「どういう意味だ？」

「ミドルネームがスイツツランド。これでご理解いただけて？」

いきり立った。「答える！ 貴様はどこに属している！」

「きゃんきゃん喚くなよ。強いて言えば、急進派リベラルさ。でも、どういうわけか恋愛感とは古風なタイプと見られがちなんだ」

「……いいかげんにしろよ。貴様」

「いいかげんにするのはそっちだ。どこまで本気だよ？」

「埒があかない」と樋口。

「うん。こいつ、何考えてるのかわからない」と野々村。

「この遊び、いい加減退屈だぜ？」とおれ。

野々村が睨みつけてきた。「遊び？ 貴様にとって、これは遊びか？」

「キミの反応からして違うんだろうな。ところで、その喋り方なんでしょうか？ 腹の皮がよじれそうだよ」

チツ、と野々村は鋭く舌打ちした。「洋介」

樋口がうなずく。「仕方ない」

天を仰ぎ、目をつむる。アホくさ。煙草が吸いたい。「五分経つ

てないけど、もう帰っていいかな？　これ以上は――」

正面に向き直って言葉に詰まった。

手ぶらだったふたりが、いつの間にやら剣を手にしてたんで。うん、見間違いないようがない。剣だ。サーベルっていうんだろうか、なんかそれっぽい洋風の剣。ナンジャコリヤ？　最初は驚いたが、あまりに頓珍漢な光景なんで、困惑から一転、にやにや笑いが浮かんだ。「おいおい、何の真似だよ？」

「これでも軽口が叩けるか？」と野々村。

「キミたち、学校になんてもん持って来てるんだ。というか、どこから出した？」

もつとよく見ようとして身を乗り出すと、樋口と野々村が同時にさつと後退した。息の合ったタイミングで上体を軽く倒し、両手で構え直した剣の切っ先をこっちに向ける。

なかなかいい動きだったが、とても馬鹿に見えた。

「様になってるよ。きつと、たくさん練習したんだろうな」

「これは遊びではない。我々は本気だ」野々村の目は静けさを湛えてた。桜色の唇が言葉を紡ぐ。「手加減するなら、後悔するぞ」

隣に並ぶ樋口は無言。

おれはまだにやにやしてたが、ふたりの剣を見てるうちに笑いがすばまりだした。何というか……重くて、硬そうに見える。よく切れそうにも。刀身なんかいやに鋭いし、全体的に精巧な作りだ。太陽の光を反射して白い煌きすら放ってる。

非常に、そう、非常に鉄っぽい。

それ、玩具だよな、と訊きかけて、「それ」までしか言えなかった。

野々村はおれから四、五メートルばかり離れたところに立ってたんだが、瞬きした僅かな瞬間に大事なところを見逃したらしい。コマ落としみたいに、すぐ目の前に綺麗な顔が迫ってた。何が起こったのか理解する暇もなく突き飛ばされて、フェンスに背中を打ち付ける。全身を使って、野々村がぐいぐいと押し付けてきた。

おれは決して小さくない——百八十三センチ、七十三キロ。見かけよりもたつぷりと肉が付いてる。なのに、百五十センチそこそこの華奢なアマツコに完全に押さえ込まれてた。

肋骨が軋みをたてる。

ふいに野々村は身を離し、剣をぶん回した。一振り目がおれのブレザーを裂き、二振り目がすぐ横のフェンスの金網を裂く。こっちはわけもわからず突っ立ったまま。剣がぴたりと静止して、その切っ先は、鼻先二センチでこっちに向けられてた。

「どこまで舐めるつもりだ！」野々村は叫び、胸倉に掴みかかってきた。

おれが何されたかつて？ 鼻っ柱をぶん殴られた。それも、へろへろの女の子パンチなんかじゃない。モハメド・アリが繰り出してきたかのようなジャブで。ぱっと目の前に白い花が咲き――

意識が飛んだとわかったのは、気がついたらうつ伏せで屋上にのびてたから。時間が見事に編集されてた。まるで、一続きのフィルムを数秒分切り取って繋ぎ合わせたみたいに。低い視界の中、上履きと黒いソックスだけがはつきりと――。

パニックに胸を鷲掴みにされた。斬りつけられたり、殴られたりしたことにじゃない。息がでんことだ。鳩尾の鈍い痛みと圧迫感から察するに、意識が途切れてる間に蹴り上げられたらしい。喉がゼーゼー鳴ってる。吸い込め、ほら吸い込め。けたたましい咳が出た。ほら、吸い込めたら！

海老みたいに丸まって貪るように酸素を取り込み、うつ伏せになった。自分が何されたかは把握してたが、ショックで頭がぼんやりしてた。赤黒い水たまりが屋上を侵食していく様を人事みたいに見つめる。

上から樋口の声が降ってきた。「ルル、どう思う？」

……ルル？

「よくわからない」と野々村。「手応えがなさ過ぎる。わざとかもしれない」

「わざと？ でも、完全にのびてる」

「……うん」

「交渉役だから、かな？」

「どういうこと？」

「だから、交渉役なら戦闘に特化してなくても不思議じゃないかなって」

「洋介、それはおかしい。そんなやつを交渉役にしたら、みすみす情報を与えるだけだ。実際、このザマだし」

「じゃあ、交渉役じゃなくて、実はただのメッセンジャーだったら？」

「それもおかしい。そんな小物を潜入させるはずがない」

脳みそがゆるゆると正常運転に復帰した。ゆっくりと身を起こし、頭を上げる。顎先に剣の腹があてがわれた。辿つてくと、その先には柄を握る野々村の手。こっちは膝立ちで、ふたりは立つてる。加害者側の立ち位置が逆だし、得物は原始的だが、この構図には嫌でも 処刑スタイル ってやつを意識させられた。

危機的状況だというのに、おれは恐怖を覚えてなかった。というか、持ちうる感情の全てが地平線の向こう側へすっ飛んでって、奇妙な無感動状態に突入してた。とても現実のこととは思えん。高校の屋上で剣を咽喉元に突きつけられるとはいったいどういう喜劇だ？ 視線を上げると困惑気味の二組の視線とかち合い、回復途中の頭でも喉を掻き切られるわけじゃなさそうだってことくらいは読み取れて——途端に、オートパイロットになった声帯が勝手に喋り出した。「……頼みがあるんだ。おれの墓石には、世界のケツを蹴り上げた男、ここに眠る と掘り込んでほしい。あるいは、田中智弘は最後まで闘士だった。不屈の意思で脅迫を退け、最後の瞬間、その手には矜持を握り締めていた でもいい。いや、ちょっとメロドラマ的かな？ どう思う？」

「……洋介。こいつヘンだ」野々村は目を細めた。「頭がおかしいのか？」と剣に力をいれておれの顎を何センチか上向かせる。喉を

突く剣先の感触がおれの全宇宙と化した。

「ルル、ここはアキサスに――」

「そこまで」と第三の声が割って入った。
声がしたほうを見る。

屋上のドアの前に男子生徒が立ってた。そこそこ背が高く、柔和な顔立ち。デザイナーズ・ブランドと思しいシャープな黒ぶち眼鏡をかけてる。よほどものに動じん性質なのか、血まみれのおれと凶器を手にしたいかれとんびカップルを前にして、怯んだ様子はなかった。

そいつに向かって救援を要請する。「おい、誰か呼んでくれ！」

無視された。黒ぶち眼鏡氏はおれをじろじろ見ながら近づいてきて、すぐ傍まで来ると、野々村に顔を向けた。「剣を収めろ」

「なぜ？」

「いいから剣を収めろ」眼鏡を剥ぎ取った。「一部始終を見ていたが、こいつは完全に素人だ。無防備すぎる。演技であそこまでできるものじゃない」

野々村が剣を引く。「こいつ、よくわからないんだ。素性も吐こうとしない」

「ああ、聞いてた」と伊達眼鏡氏。「……もしかしたら、大失態かもしれない」

「どういう意味だ？」

「我々は被害妄想に陥りすぎていたのかもしれないって意味だ。いくらなんでもおかしい。まさかとは思うが、俺は今、こいつが無関係な一般人という可能性も考え始めてる」

「そんな馬鹿な。考えすぎだ」

「ああ、そうかもな。どっちにしろ、ここじゃ答えを出せない」

おれは黙って両者のやりとりを眺めてた。わかったことがいくつか――。

？・この伊達眼鏡氏は、樋口と野々村の知り合いである。？・こいつらにとって、剣を持ち歩いたり、人に向かって使ってみたりす

ることは、特に珍しいことではない。？・こいつらはどこか浮世離れしている。または、芝居がかっている。あるいは、頭のねじが何本か外れている。？・こいつらの被害妄想とやらが原因で、おれは精神的外傷を被った上に、一リットルほどの血液を失った。？・いつの間にか、剣が消えてる。？・どうやら、リンチ／死刑は延期さらたらしい。

そして最後に、おれはもうこれ以上、係わり合いになりたくないと思っている。早く帰りたいと思っている。

ゆつくりと立ち上がり、連中から二歩ほど離れて、鼻の奥から口内に流れ込んできた生暖かいやつを吐き出した。まったくもって酷い有様。制服のそこら中に血が跳ねて染みを作ってる。ワイシャツには鮮やかな赤、ブレザーの前身ごろにはどす黒い赤。仕上げに、胸で口を開けてる横一文字の切れ目。マリリン・マンソンのライブ会場なら、極自然なファッション・センスと認めてもらえるかもしれない。

三人に向き直り、朗らかに言った。「さて、楽しかったよ。有義かつ充実した経験だった。とても名残惜しいけど、そろそろ帰るよ」

「何を考えてるのかわからんやつだが、肝は据わっているようだな」伊達眼鏡氏は感じ入ったように寸評した。

「ただのヘンなやつだ」野々村は顔をしかめた。

「いやいや、見上げたものだ」

「どうする？」と樋口がふたりに伺いを立てる。

伊達眼鏡氏がすっとおれの前に移動した。「少し付き合ってもらおうか」

「悪いけど、これから警察に被害届けを出しに行くんだ」

「警察？ とんだ道化だな」

「好きに言ってる」

おれが脇をすり抜けようとすると、その動きに呼応して立ちはだかり、まあ待て、というふうに関手の掌を掲げてきた。

「付き合つまで帰さんつてか？」

「我々は話をする必要がある」

「さつき、そのくそアマにも同じことを言われたんだけどさ」野々村に向けて顎をしゃくつた。「話をするはずが、なぜかサンドバッグにされて、殺されかけた。今度は違ふと考えるほどおれはお人よしじゃないよ」

微笑み。「どうこう言える立場だと思つてゐるのか？　付き合つてもらふよ」

「ボク、知らない人についてっちゃ駄目だつてママに言われてるんだ」

「従わない場合は実力行使に及ぶことになる」

「……なるほど。そういうことなら、仕方ないね」

気弱な笑みを浮かべて、肩をすくめてみせる。伊達眼鏡氏の肩から力が抜た。途端におれはダツシュしたんだが、二歩も行かんうちに後頭部に衝撃が走り、視界が真っ白になつて――

――とてもいい夢を見た。

小学生の頃、同じクラスの安部つぐみのことが好きだったんだが、彼女と一緒に美術館へ行く夢だ。

安部は漫画家を目指してて、絵心のある者同士、互いの絵を比べあつたり話をしたりしてゐるうちに、気づいた時には恋に落ちてた。報われることなく終わった、おれの初恋。当時はウブだったんで、告白の言葉を握り締めてもたもたしてゐるうちに卒業式を迎え、安部は私立のお嬢様学校に進学した。彼女とはそれっきり。

なんであれ、小学六年生の安部と十七歳のおれは、マックス・クリンガーの版画展に行くために電車に乗つてた。たわいのないことを話してゐただけなのに、すごく楽しかった。電車が目的地の駅のホーム滑り込み――

「なかなか目を覚まさないですね。小突いてみましょうか？」と女

の声が聞こえた。

「薬が多すぎたんだろうか？」と不安そうな男の声。

「いいえ」と最初の声が答える。「適量です」

寝ぼけ眼に飛び込んできたのは、自分の脚と寄木作りを模した床椅子に座ってるらしい。

どうにも身体が動かんのでもまだ夢を見てるんだろうと思ったら、身体がガムテープでぐるぐる巻きにされてた。……ガムテープ？

身体を擦ってみたが、椅子の背もたれに縛り付けられているようで動く余地がない。状況は芳しくない——が、どうでもいいほど眠かった。頭が重くて、意識に霞がかかったような浮遊感がある。

「お、目が覚めたようだ」

顔を上げると、二十歳前後の男がこっちを見て微笑んでた。その隣には、ショートカットの女。

おはよう、とか何とか言おうとして、声が出ないことに気づいた。口がパクパク動くだけ。何度か試してから早々に挨拶は諦め、また寝ることにした。

「マクバ」と男が言う。

ショートカットの女が魔法瓶片手に近寄ってきて、片膝をつき、湯気が立ち上る液体を蓋に注いだ。その蓋をおれの唇にあてがう。

「ほら、飲んで」

草みたいな匂いが鼻につき、思わず顔を背けた。

——その臭いものをどける。いいからおれのことはほったく。ただ、泥のように眠りたいんだ——

白い手がおれの頬を掴み、顎を上向かせて、熱い液体を強引に流し込んできた。むせ返り、頭を振って抵抗する。ほとんどが口の端からこぼれ、いくらかが気管を詰まらせ、ほんの少しが喉を駆け下った。

咳き込んでるうちに飛来したのは、意識明晰にしてクリアな瞬間。

——ふいに屋上の一件が脳裏に蘇り、我に返った。

涙越しに、傍らに立つショートカットの拷問吏を見上げ、次に、

椅子に腰かけた男を見る。

室内に目を走らせた。わかったのはどこかのマンションの一室らしいってことだけ。生活の臭いがまるでない。引越し作業が完了した時の世田谷のマンションにそっくりだ。

ここはいつたいどこだ？ 何が起こってる？

「田中くん」と男が言った。「まず謝っておく。きみを巻き込んですまなかった。本当に悪いことをしたと思っっている。だが、視差をもつて眺めれば、僥倖とも言える。……まあ、それもきみの返答次第だが」

おれは聞いてなかった。今更ながら、声が出ないことにショックを覚えてたんで。舌をくねらせ、喉に力を入れ、大口を開ける。発声できたのは、不明瞭な「ぐう、ぐう」だけ。

「おっと、忘れていた。安心したまえ、田中くん。喋れないのは一時的な措置だ。ここへ連れて来るまでの間に意識を取り戻して大騒ぎされては困ったのだね。とはいえ、この部屋は防音がしっかりとしている。音大生や、日常的に楽器に触れる人が借りる部屋だ。叫んでも隣近所には聞こえない。簡潔に言うと、助けは来ない。以上の点を理解し、きみが紳士らしく振舞うのなら、喋れるようにしてあげよう。どうだ？」

おれはうなずいた。

「マクバ」と男が言う。

ショートカットの拷問吏が手をのばし、おれの喉に指先で触れて、口の中でぶつぶつ言った。十秒もせんうちに指が離れる。「もう喋れるよ」

おれが見上げたまましていると、マクバと呼ばれた女は笑顔を浮かべ、「ほら」と促した。試しに発声すると、「あー」と嘸れ声が出た。

この女、何をした？

男に目を戻す。「その、何というか、意味がわからない」

「安心したまえ。全て説明する」

「その前に、この安上がりな拘束具、剥がしてくれませんか？」

「ああ、すまない。わたしは反対したんだが、ルルがそう言うと言
って聞かなくてね。ルル」とおれの背後に呼びかける。

首を捻って肩越しに振り向くと、入り口のドアに背中を預けて野
々村が立ってた。胸の下で腕を組み、冷ややかにおれを見つめ返す。
ルル？ どこかで聞いたような……？

「さあ、彼を自由にするんだ」

「そんなやつ、そのままでもいい」

「何事も信頼が重要だ。ガムテープでぐるぐる巻きにされて、心を
開いてくれると思うか？」

「わたしは反対だ。そんなやつ、役に立たない」

「わたしは役に立つと思う。マクバ、君はどう思う？ 正直なところ
を聞かせてほしい」

ショートカットはおれを見下ろした。「可愛い顔をしてると思います。
ちよつと汚れてますが」

「あー、それは賛成という意味だろうか？」

「ええ」

男は勝ち誇ったように言った。「二対一だ。ルル、彼を自由にし
ろ」

野々村はカーペットの上の犬の糞でも見るように睨みつけてきた
が、面倒くさそうに背後に歩み寄り、いつの間にか取り出してた例
の剣をおれの脇に差し入れて、無造作にガムテープを切断した。ふ
いと離れて持ち場に戻る。残りは自分でやれてことらしい。

自由になった右腕でガムテープを剥がしにかかった。手伝ってく
れたショートカットに礼を言い、血でがびがびになったブレザーの
襟を引っ張って、足を組み、椅子に寄りかかる。

……ふうむ。この状況はどう考えても誘拐だ。まさか、自分がそ
んな目に遭う日が来ようとは思わなかった。しかも誘拐犯の
ひとりは知った顔で、同じ高校生ときてる。だがルルだって？ 渾
名か何かか？ 役に立つとか立たんとか、意味がわからん。室内の

誘拐犯は三人、逃げられるかどうかは微妙なところで、安心材料は、野々村以外の二人には敵意があるようには見えんってこと。とりあえず内ポケットから煙草を取り出し、火をつける。

男が咎めるようにおれを見た。「ここは禁煙だ」

「知ったことじゃありません。おれは家に帰れるんですか？」

「もちろん帰れるとも」

「そういうことなら」と言って腰を上げると、肩を押さえつけられて椅子に戻された。マクバ女史が首を振る。

注意を惹くように男が咳払いした。「田中くん。全てを聞いた上で、きみにはふたつの選択肢が与えられる。ひとつは」とブレザーの胸ポケットから注射器を取り出した。「何もかも忘れてもらうことだ。ただ、これはあまりお勧めできない。若干の副作用が伴う。

軽い吐気、頭痛、食欲不振、手足の震え、精力の減退、下手をする、意図した以上に記憶が消えることもある。ときによると数年分も。まあ、個人差があるんだ。この薬、効果は抜群なんだが、甚だ残念なことにあまり安定していなくてね。田中くん、ついてきてるか？」

「おれは全身を耳にしています」

男は、よし、というふうにならずいた。「もうひとつの選択肢は、我々の仲間になることだ。我々は歓迎する」

背後で野々村が鼻を鳴らした。

「彼女は無視してくれて構わない」

「えー、仲間、というのは？」

「これから説明する。手始めに自己紹介といこう。わたしはアキサス・ギータ・トランファルタという。ルシタndaニア・アブル王国 秩序平和維持機構 第2グループに所属する軍人だ。階級は、あー、こちらで言うところの中尉に該当し、この地域の最高指揮官でもある」

念のために言っておくと、アキサスナントカと名乗るこの男の外見は、まるつきり東洋人のそれだった。おれは黙って煙草を吸った。

「次に、きみの横にいるのはマクバ・ヌイ。わたしの部下で、腕の立つ調査士だ。田中くん、可笑しいかね？」

「いえ、どうぞ先を続けてください」

「よろしい。最後に、きみがよく知っている野々村加奈だが、本名をルル・テージェ・フロアンという。やはりわたしの部下だ。――つまり、彼女のこちらでの姓名・身分・経歴は、全て偽装だ。桜ヶ丘高校二年一組、野々村加奈なる者は、書類の上でしか存在しない」

つい口を挟んだ。「この部屋にいる日本人はおれひとりだけだ」と

「そのとおり」

「ルシタナントカってどこの国ですか？ そんな国、ナシヨナル・ジオグラフィック で見たことありませんけど」

「平行世界の 地球 にある」

「なるほど。平行世界。親戚ん家の衣装ダンスから行けるような場所ですね」

アキサスは眉をひそめた。「いや、行き来するのにそのような方法は取らない」

おれの我慢が臨界点に達したのはここだ。文字どおり笑い転げ、パイプ椅子からずり落ちた。暴行を受けた体の節々に痛みが走ったんで無理矢理笑いを収める。「これ、何て宗教サークル？」

「うむ、よくわかる反応だ。さて田中くん、論より証拠といこうじゃないか。さつき偽装と言っただろう？ わたしの今の姿もその一環だ。本当の姿は見せられないが、それでも充分呑み込めるはずだ。マクバ、変えてくれ」

それを受けてマクバ女史がまた何かぶつぶつ言った。すると、アキサスの顔立ちがみるみる変化しだした。黒髪がくすんだ金髪になり、肌が白くなり、瞳が金色になり、急激に十歳ほど老け……。全然違う顔になったっていうんじゃない。面影はしっかり残ってる。いろいろ変わりはしたものの、さっきまでの少年っぽさが消えて、今じゃ、精悍な顔立ちをした二十代後半から三十代始めのハーフに見えるっただけで……。

おれの笑顔は凍りついた。

マクバ女史を見上げる。こっちは、干からびた老婆になっていた。老婆はしわくちやの笑みをひらめかせると、おれの襟首を掴み、御老体らしからぬ腕力でぐいと引き上げ、椅子にきちんと着席させられた。

振り返る。野々村はいつもの野々村だった。無関心にこっちを眺めてる。

また前を向く。「……マジで？」

「おや、やけに言葉数が少なくなったじゃないか」自称アキサスは声も変わってた。「信じる気になったかね？」

信じる信じないどころの話じゃない、たった今目にしたもののせいでおれの世界の関節が外れたのだ！ こういう場合、こっちに歯を立てる現象から一步下がって息をつきたいってのが正直なところ。頭の中で超新星爆発を起こしてる経験をきれいに整理して、インデックスをつけ、注釈を加え、脚注を書き込み、不明点を明らかにし、納得のいく説明をひり出して、出来事の渦中で自分を見失いがちなおのまな脳みそでも呑み込める大きさに切り刻んでやるために。

だがこの一回限りの生じや、そういうときにかぎって事態がどんな進行していく。人生が用意した速度に適応できるかどうか、ダーウィニズムの篩にでもかけてやろうってふうに。

「まず簡単に背景の説明をしよう」とアキサスは言った。「今から五年前、我々の――」

「ちよつと待ってください。もう一度見せてもらえませんか？」

アキサスはしばし黙考し、いいだろう、と言った。「マクバ、頼む。田中くん、時間がないのでこれが最後だ」

何ひとつ見逃さんって勢いでアキサスを食い入るように観察したんだが、今回も、タネや仕掛けの存在を全否定するほど自然な変化だった。まるで蕾が花開くように、あらゆる偉大な自然の営みと同様、そうなるべくしてそうなると言わんばかり。ものの数秒でインターナショナルな青年は白人の中年男になってた。

膝に肘を突き、頭を抱える。何年にも渡って降り積もった常識が見たものを拒絶すべく喚きたてちやいたが、頭の残りの部分は冷静に受けとめてた。――見たものを信じる、こういうことも有り得るのだ――と。

「さ、ご要望には応えた。きみ、大丈夫かね？」

のろのろと顔を上げる。「自分の正気を真剣に疑ってる最中ですが、それ以外は、これ以上ないってくらい大丈夫です」

「何か飲み物を用意しようか？」

「あー、熱いコーヒーを。もしあるんなら」

「よかるう。マクバ」

マクバ女史が部屋から出ていき、湯気の立つマグを載せたトレイと灰皿代わりの小皿を手にして戻ってくるまでの貴重な五分間を、おれは自分を落ち着かせることに費やした。

1 揉め事、おれの心の猿、剣、拉致（後書き）

バックアップ発見。適当に続きを投下していきたいと思います。バイバイキーン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4139q/>

スライラッド・ヨネ・アブガリオン・四世ハナの心臓にまつわる話

2011年1月28日00時25分発行